

第3節 近世備前焼擂鉢の編年案

今回の発掘調査では近世の備前焼が多数出土したが、うちでも擂鉢の存在は目立っている。考古学の立場から備前焼の編年⁽¹⁾を大成したのは間壁忠彦・間壁葭子の両氏である。それは平安後期から江戸時代前期をI期からV期(ないしはVI期)に分けるもので、広く活用されている。しかし、江戸時代前期以降の編年作業はこれまであまり進んでおらず、根木修氏による検討成果⁽²⁾もあるが、状況はまだ混沌としている。近年は生産地での調査⁽³⁾や編年研究を廻る動向⁽⁴⁾に進展があり、それらも踏まえて、近世備前焼(間壁V期後葉以降)の擂鉢に限った編年案を叩き台として提示しておきたい。

1. 近世1期 (16世紀第2四半期末～17世紀初)

中世来の放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されるものが出現し、かつそれが主体を占める段階である。見込にスリメを入れることも一気に普遍化する。ナナメ方向のスリメは、上からみて口縁側が反時計方向に延びるのを専らとするが、これはすり粉木を時計廻りに回転させる場合の必然的な方向である。器面の塗土や火櫻は、原則として認められず、褐紫色～暗赤褐色に発色するものが多く、よく焼き締まり、黄ゴマが掛かる個体もしばしば目に見える。

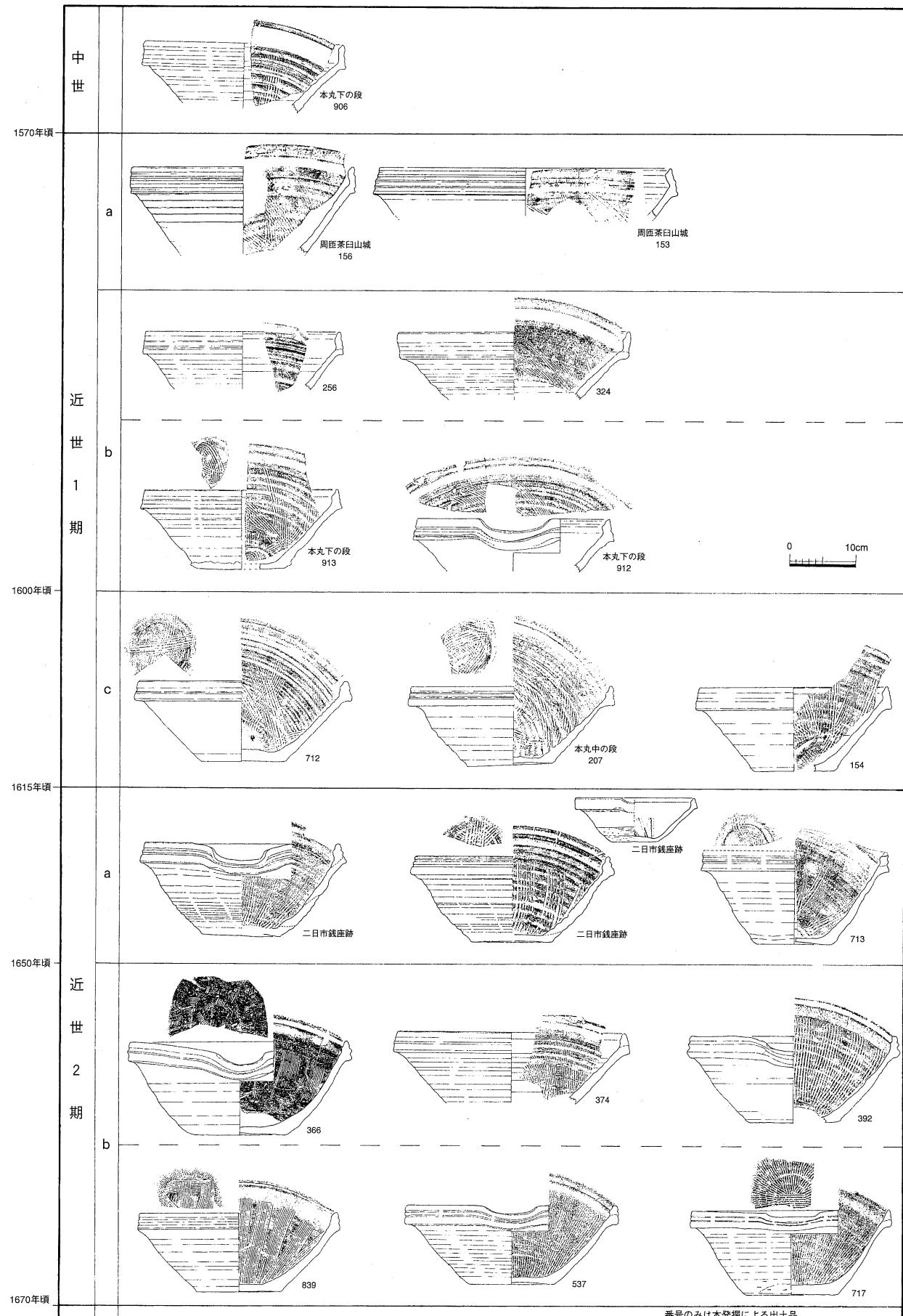
a期・b期は、口縁帯が中世に引き続いて薄板作りでかつ高く、全体の作りも備前焼擂鉢の変遷過程のうち最も纖細でシャープな段階で、口縁外面の凹線は3～4と多条なものが含まれる。口端を摘み上げ状に小さく押えた結果、内面の口縁直下に稜をもち前段階の中世末によくみられた形態のものをa期、口縁内を強く押えた結果、口端が先細りとなり、口端から下がった位置に稜もしくは段をもつものをb期に分類したが、両者を本当に時期差として捉えうるか否かは、今後の検討課題である。

b期新相、さらにc期では、器高を減じ、口縁は厚く、立上りが低くなって萎縮し、凹線は2条に定型化する。特にc期には、口縁下の顎が張り断面が三角形となるものが目立っている。こうした形態は、口縁で重みを受けて重焼をするに際してのb期までの欠点を克服し、強固な口縁を追求するとの本旨に立ち返った結果と評価できる。スリメはc期には、かなり高密度なものも出現している。

なお、近世1期には少量とはいえる放射スリメのみの一群も存在すると考えたほうが良さそうである。また、見込スリメのパターンは、初源は+形の可能性があるが、○形、△形、×形なども加わって多彩である。後に主体となる×形はb期には成立しているが、まだ主流ではない。胎土は、a期からb期の古い段階までは、暗褐紫色で砂粒が少なくねっとりした感じの微粒のもの(田土)が多いが、以後は暗灰色系で黒色鉱物粒などを含む粗めのものが目立ってくる。

スリメの高密度化、分厚く頑丈な口縁、口縁帯の2条凹線などは、以降の段階に引き継がれて行く要素であり、こうした近世的要素の出現という点で、近世1期の意義は名実共に重大である。

暦年代を考える資料として、1b期古相品では1580年銘土器などと共に姫路城大天守地下⁽⁵⁾や1585年の焼打ちを下限とする根来寺坊院跡⁽⁶⁾の出土品、近世1b期の新相品については1598年の三の丸造成を下限とする大坂城の豊臣前期の遺物群⁽⁷⁾、近世1c期については1515年の大坂夏の陣焼土層を下限とする大坂城豊臣後期の遺物群や同じく堺環濠都市の遺物群⁽⁸⁾、それに1620年代を下限とする岡山城本丸中の段第IVb期の層位の出土品⁽⁹⁾などがある。また生産地では1b期の資料として備前南大窯東3号窯⁽¹⁰⁾、1c～2a期の資料として備前南大窯西2号窯⁽¹¹⁾の出土品がある。



第116図 近世備前焼擂鉢の編年その1 (1 / 8)

2. 近世2期（17世紀前葉～第3四半期）

ナナメ方向のスリメがなくなり、再び放射状のものだけになる段階で、この期の過程を通じてスリメが完全に詰まる。口縁帶外面の凹線は既に2条に定型化しているが、沈線的なものが多い。焼成は依然として良く焼締まり、器面は褐紫色～暗赤褐色、断面は暗灰色に発色するものが多い。

a期では、1c期に続いて、口縁が厚く、下顎の張出しが顕著で断面三角形に近いものもあるが、1c期にあったような極端に萎縮した口縁はかえってみられない。口縁下内面に丸みをもった突起が明瞭なものが多い。スリメは十分に間隔を置き、口縁近くまで及ばないものもある。胎土は1c期に続いて黒色鉱物粒を含むものがある。

b期の口縁は、やや薄めとなって、下顎部の張出しが弱まり、口縁下内面の突起は退化傾向にある。スリメは相当に詰まり、b期の内に江戸中期・後期の水準に到達してしまう。見込スリメも同様に高密度化するが、そのパターンはa期では多様であったのに、b期では＊形に定型化してくる。b期の新相品は、体部外面は依然としてロクロメによる凹凸があり、ヘラケヅリなどによる平坦化は行われていないが、底面は整ったベタ底になっている。以前の底面は、粘土のはみ出しや指頭圧痕・ロクロ台圧痕などが顕著に残って凹凸が激しかったのと対照的である。ただし、底部板起こしの成形法そのものは変化ない。胎土はb期にも黒色鉱物粒を含むものがあるが、次第に減ってくる。

近世2期では器面への本格的な塗土はまだないが、ナデ調整を受けた表皮(友土)が塗土的な効果を生み出し、ごく薄い表皮のみが一様に暗紫褐色系に発色するのに、断面は暗灰色系のことが多い。火櫻きはほとんど観察されないが、a期を中心に黄ゴマが掛かる個体がある。近世2期までは口縁の上端と顎部に重焼き時の熔着痕が顕著に観察できる。

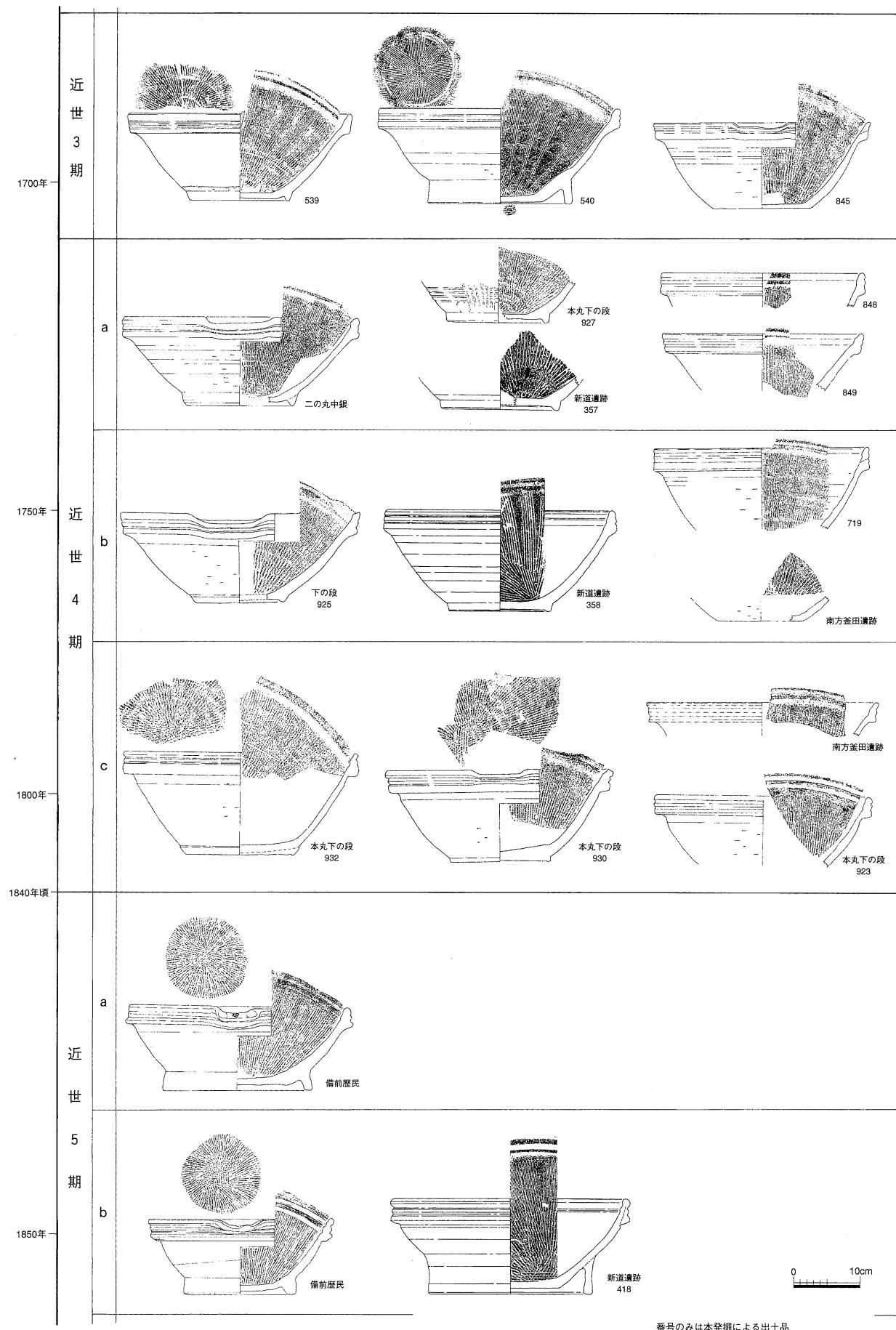
また、口径16cm級の小形擂鉢もあり、法量分化の進展が窺える。小形品は中形品に先駆けて外面体部下間にケズリを施すものがあり、スリメは中形品よりクシ原体が細くてシャープなものが多い。

a期の暦年代を考える資料として、1640年下限の二日市遺跡銭座跡出土品⁽¹²⁾、1654年の承応洪水を下限とする岡山城二の丸(中電)出土品⁽¹³⁾などがある。

3. 近世3期（17世紀第4四半期～18世紀初）

高台をもつ器形が出現し、それが量の主体をなす段階である。体部はロクロメが目立たず平滑となり、塗土が一般化する。この塗土は、胎土同様に鉄分を含む友土を、釉薬的効果を期待して口縁から内面、あるいは外面から内面全体へ塗り込むものである。塗土に加えて、酸化炎気味の焼成と焼締度の低下が連動し、器面は暗茶褐色～暗褐赤色、断面は明褐色系統と以前より明色のものが多くなり、器面が暗褐紫色で断面暗灰色のものは激減する。また体部外面に火櫻が顕著なものを多く含み、2期にはあった黄ゴマが掛かる個体はほとんどみなくなる。スリメは詰まっている事に変わりないが、従来は原体が木グシ様で沈線が太めであったのに対し、原体が金グシ様で沈線が細くて深いものが目立ってくる。見込のスリメは＊形にほぼ定まっている。口縁は、内面の突帯がさらに退化して、全く平坦なものもあり、口縁下の顎部張出しが弱まってナデ肩状のものが目立っている。高台内や注口部に刻印を施したものも出現する。こうした変化は、他の施釉陶器の動向とも連動した、整美化・繊細化に違いなく、備前焼擂鉢における元禄前後の変革の結果と評価できよう。

主流形態は、底部外端に断面逆台形の低い高台を貼付るもので、これが大坂堂島や初期の堺産擂鉢のモデルとなったとみられる。また体部下寄りに円筒形の高台を貼付るものもあるが、作りが丁寧で



第117図 近世備前焼擂鉢の編年その2 (1/8)

高級品であろう。高台を持たないものもあるが、その底面はおのずと整美なベタ底となっている。

また近世3期は体部のヘラケズリが一般化する段階である。以前でも余分な粘土を整えるために軽くケラケズリを施すものがあったし、小形品では既に体部下半にヘラケズリを施すものがあったが、それは偶発的であったり限定的であった。この期に出現した高台をもつ個体では、ヘラケズリがたいへん高台内に施され、一部は高台脇に及んでいる。これは高台の貼付けに先立つ工程として貼付面を整える意味ないと、体部を整美に仕上げる意味合いをもっている。ただし、この3期では体部の過半に及ぶものはまだ少なく、前者の意味合いが強いものが多い。ヘラケズリは正位に置いて砂粒が左に動く方向で、砂粒が右に動く堀島・堺・明石産擂鉢と異なっている。

重焼きの方法に関連しては、2期に統いて口縁上端と頸部に顕著な熔着痕を残すものもあるが、その熔着痕の痕跡が弱いもの、合わせて見込斜面や高台下角・底面外角にも熔着痕をもつもの、見込斜面や高台下角・底面外角のみに熔着痕をもつものがあって、製品を直接に重ね焼きする点は変わらないが、重量を受ける部位が高台と体部に移りつつあることが分かる。

近世3期の製品は江戸⁽¹⁴⁾でも散見され、暦年代を考える資料に、1698年下限の江戸尾張藩麹町邸跡の出土品(筒形高台)⁽¹⁵⁾や江戸遺跡の東大編年Ⅲ b～Ⅳ b期の資料⁽¹⁶⁾などがある。

4. 近世4期（18世紀中葉～1840年頃）

体部外面のヘラケズリは、高台の有無や形態にかかわらず、上半まで及ぶのが普遍化する。とくにb・c期には胎土に石英粒などを含み、ケズリ痕が粗くて深いものが目につく。

高台をもつものが圧倒的で、無いものが主流である併行期の堺・明石産擂鉢と大きな違いとなっている。断面逆台の低い高台をもつものが引き続いて主体をなすが、これは時期を追って退化する。すなわち、a期では3期よりも畳付が狭くなったものを含みつつ、まだしっかりした造りであるのに、b期には高台内が相当に浅くなり、c期には貼付ベタ底の外寄りに沈線を廻らせて畳付の痕跡を区画する程度となっている。3期の筒形高台や次の5期との関連で高い高台を持つものもあるかも知れないが、今のところ実体は不明である。高台の無いベタ底のものも、少量ながら併行してある。

口縁内面は平滑なものほか、浅い凹線状のクセを持つものがある。口縁帶外面の凹線はb期までは近世2期から続く沈線的なものが多いが、c期には粗大化する。またb期までは鍔部の張出しが弱くナデ肩状のものが多いが、c期には鍔が張出し三角形のものが目立つ。これは、高台が退化し、重焼き時の重みを再び口縁で受けた必要があったこと、運動するかも知れない。注口部は退化傾向にあるとはいえ、堺・明石産擂鉢に比べればしっかりしている。

スリメは引き続き細線がいっぱいに詰まるが、3期のような極端に鋭く深い条線をもつものはさほどない。また、スリメの上で見込部と体部を区別する意識は薄れ、口縁に続く施文は見込の中央から始まり、重複して見込んで完結する交差文を施すものが一般化し、粗雑化が読み取れる。なお、口縁部に一旦及んだスリメをナデ消すことは原則としてなく、堺・明石産擂鉢と異なる。

器面の塗土(ナデによる友土コーティング)は一般化していて、a期あたりはまだ茶褐色に発色するものも多いのに対し、b期以降はエビ茶色に発色するものが多くなり、断面色は明褐色もしくは暗赤褐色が主体となる。またb期以降は焼締めの程度が急激に低下し、使用による摩耗で胎土の生地が露呈したり、塗土が膜状に剥げ落ちていることがある。口縁から体部にかけて火襷は続いているが、周囲との色彩差が乏しくなっている。

近世4期の消費地資料は岡山県下を除いて乏しいが、岡山城の内外ではけっこう出土例がある。曆年代を示す決定的な資料はないが、コンニャク印判手、陶胎染付、青磁染付、あるいは高高台といった18世紀から19世紀前葉の肥前磁器などと良く共伴している。

5. 近世5期（1840年頃～明治初め）

引き続き高台をもつものが圧倒するが、近世4期を通じて退化の一途をたどった高台の姿はなく、高くまた畳付が広いしっかりした高台に取って代わる。この一点をとっても、近世5期(天保窯導入期)の備前焼が旧来を刷新し新しい要素を受け入れたことが判る。併行期の堺・明石産擂鉢とは既に異質の感が強い。

高台形はバリエーションに富むが、a期としたものは高台が高くて踏ん張りも大きく、しだいに退化し、c期としたものでは低く断面逆台形となり、蛇目高台風のものも現れる。

体部は内湾気味で、ボール形に近く、外面のヘラケズリは引き続き認められるが、塗土や二次的なナデで消えて観察されないものも多い。口縁内面は概形では体部から連続的な曲線を描くが、細かくみるとa期・b期では凹線風のクセをもつものがあるのに対し、c期は平滑となる。また、a期・b期では口縁外面の凹線が引き続き粗大で深く、また分厚くて頑丈な口縁をもつものが多いが、c期では外面の凹線がナデ窪み状に退化し、口縁全体が華奢な造りとなっている。この変化は、口縁帯成形が従来の粘土帶上乗せ式から、口端側部への粘土貼付式に変化した事と対応している。注口はずいぶん幅が狭くなっているが、きっちと垂下させて機能性をまだ保っている。

スリメの太さは3・4期と同様のもの、それより太めのものもあるが、鉄クシ様の原体による相当に細かなものもあり、c期にはそれが主体となる。また備前焼の擂鉢は口縁下のスリメをナデ消さないのが原則であったが、a期からナデ消すものが散見されだし、c期にはそれが普遍化する。スリメをナデ消さないものでも、上端は高さがよく揃えられ、口縁付近でも隙間なくスリメが施される点は、近世4期との違いといえる。見込では、口縁へと延びるくスリメが見込の中央から始まって激しく切合、特にc期では見込で完結して図形を描くスリメが全く施されないものが多くなる。また、それを施すものでも従来の＊形はあまりみかけなくなり、痕跡的であったり、逆に工人の好みで任意に入れたような独自形のものがある。

焼成は連房式の天保窯の導入とも関連して4期よりさらに焼締度の低いものが多く、胎土は4期より微粒で精製されているが、砂粒が溶けずに破断面がざらつとしたものが多い。また塗土を施し、酸化炎焼成で器面が暗褐赤色～赤褐色に発色するものが多い。c期には塗土を施さずに器面・断面とも同じ明褐色～オレンジ色のものが増えてくる。火襷は、引き続きよく認められる。

窯詰に関連しては、高台外角と見込斜面に顕著な熔着痕を残す一方、口縁での熔着痕はみられなくなり、高台と体部での重ねが絶対化する。これは高台の大形化と口縁の強度低下と連動する。

ここでは近世5期を3分したが、その変化は出土層位や共伴遺物で裏付けられたわけではなく、今後の検証が必要である。この期の全般にわたる生産地資料として南大窯西1号窯⁽¹⁷⁾の出土品があり、詳細な検討が期待できる。なお、南大窯西1号窯での主力器種は擂鉢であるのに、近世5期の消費地出土例は遠隔地ではなく、岡山城下で知られているに過ぎない。その一方、備前地域の郷町や農村では伝世品として見かけることが多い。他地域で関西産にシェアを奪われた備前焼擂鉢は、自国内の内需拡大に活路を見出したといえるかもしれない。

6. 近代

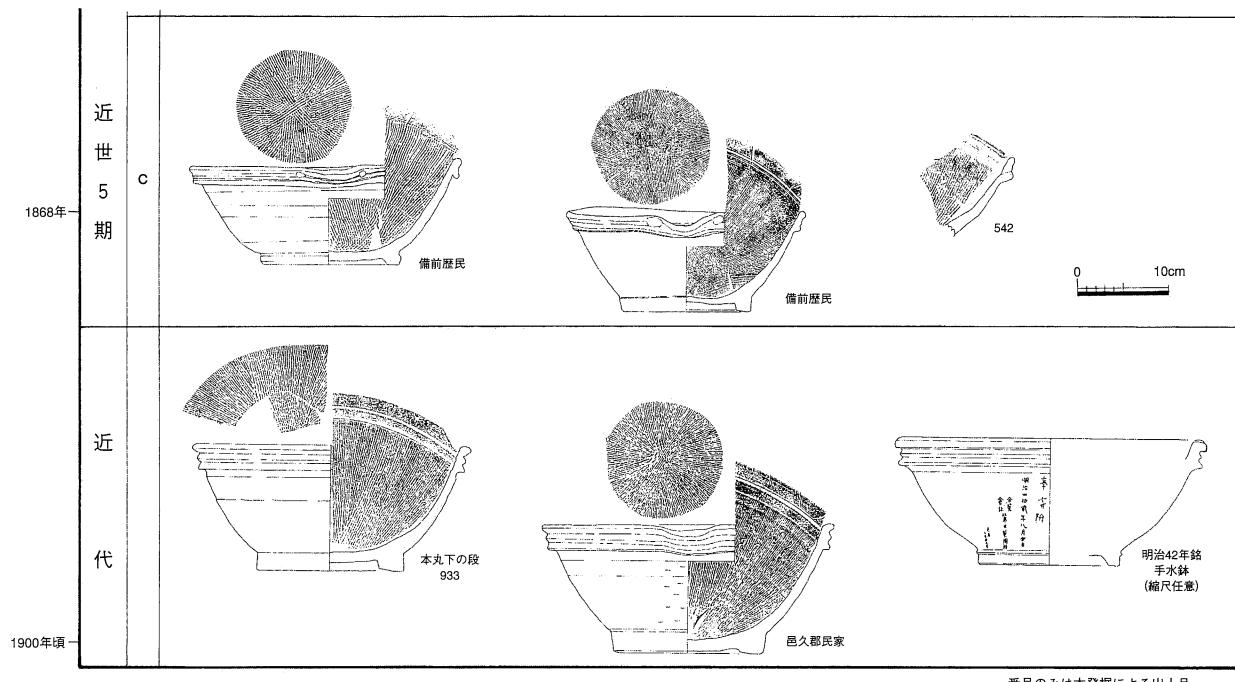
明治～大正期の擂鉢や参考となる1909年銘の擂鉢形手水鉢⁽¹⁸⁾は、近世5期に引き続きて、体部がボル形で、断面逆台形の高台をもつ。口縁上端には水平に近い面をもち、口縁帶外面の凹線は粗大である。これは、口端をいったん逆L字に成形し、その口端の下方に突帯二本をもつ薄い粘土を貼付することで、二条凹線を作り出した結果である。注口はかなり退化しているが、まだ体裁を保っている。スリメは、口縁側端がナデ消しによって揃えられ、見込みでは体部へ続くものが切り合い、その切り合い部を調整するために見込みで完結するスリメを僅かに入れることもある。体部のヘラケズリ痕が観察できる個体では、砂粒が左に動いており、近代に入ってもケズリ(ロクロ回転)の方向に変化がなかったことが判る。大窯・天保窯の廃止と個人窯の成立とも連動し、焼締度は低い。胎土には砂粒をけっこう含み、器面・断面とも明褐～オレンジに発色し、塗土はないが、火襷はよく観察される。

消費地では他地域産の擂鉢に比べて少ないが、旧岡山城下で出土が確認できるほか、備前地域の郷町や農村で伝世品としてよくみかける。

注

- (1) a 間壁忠彦・間壁葭子 1966・1966・1968・1984「備前焼研究ノート」(1)(2)(3)(4)『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
b 間壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブリー60 ニューサイエンス社
c 伊藤晃・上西節雄 1977『日本陶磁全集』10備前 中央公論社
d 伊藤晃 1995「備前」「概説 中世の土器・陶磁器」など
- (2) 根木修 1984「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会
- (3) 備前市教育委員会が1995～1997年度に行った備前焼紀念銘土型調査(備前市教育委員会1998『備前焼紀念銘土型調査報告』)や備前市教育委員会が1999～2002年に行った史跡南大窯隣接地での発掘調査成果。
- (4) 1999年に発足した中近世備前焼研究会での検討成果(中近世備前焼研究会 2000『第3回中近世備前焼研究会資料』)など。
- (5) 秋枝芳 1988「姫路城大天守地下出土遺物の再検討」『網干善教先生華甲紀念考古論集』同記念会
- (6) 和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会 1981『根来寺坊院跡』昭和55年度ほか
- (7) a 森 毅 1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会
b 鋤柄俊夫・森毅 1993「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会 研究紀要』第2号
- (8) a 土岐市美濃陶磁資料館編 1996『堺衆のやきもの』 ほか
b 永井正浩 1999『堺環濠都市遺跡出土の備前焼資料』第1回中近世備前焼研究会レジメ
- (9) 岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』
- (10) 備前市教育委員会 1999『伊部南大窯跡西隣接地発掘調査現地説明会資料』
- (11) 備前市教育委員会 2000『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査現地説明会資料』
- (12) 出宮徳尚1985 「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 1982年版 ほか
- (13) 中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会1998 『岡山城二の丸跡』
- (14) 堀内秀樹 1992「『備前系焼締め擂鉢』の系譜」『東京考古』10
- (15) 新日本製鐵株式会社・紀尾井町6-18遺跡調査会 1994『尾張藩麹町藩邸跡』
- (16) 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題』II 江戸陶磁器研究グループ
- (17) 石井啓 2000「伊部南大窯周辺窯跡群の出土遺物について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- (18) 備前焼紀念銘土型調査委員会・備前市教育委員会1998 『備前焼紀念銘土型調査報告』

本稿は中近世備前焼研究会での発表をもとにしており、参加者全員による検討成果に負う部分が大きい。生産地を所管する備前市教育委員会の石井啓氏からはとくに多大なご教示と助成を戴いた。また、関西系擂鉢の理解については52頁に掲げた文献を参照した。



番号のみは本発掘による出土品

第118図 近世備前焼擂鉢の編年その3 (1/8)

図の出典など

番号のみは岡山城三之曲輪跡出土の本報告書記載品。

他遺跡の番号も各報告書などの遺物番号。

本丸下の段：岡山市教育委員会 2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』

本丸中の段：岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』

周匝茶臼山城：岡山県東部の吉井川中流部にあり天正7年廃城と伝わる中世山城。岡山県吉井町教育委員会 1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告』

二日市銭座：岡山城下の南端付近に当たり、1637～1640年に銭座が操業。1982年に岡山市教育委員会が発掘調査を実施。(出 宮徳尚1985 「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 1982年版 ほか参照)

二の丸中銀：岡山城二の丸跡の上級武家屋敷に当たり、1990年に岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が発掘調査を実施。

新道遺跡：岡山城下の南部の下級武家屋敷。岡山市教育委員会 2001『新道遺跡』

南方金田遺跡：岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が1986～87年ほかに発掘調査を実施。

備前歴民：備前市立歴史民俗資料館保管の伝世品。原図は石井啓氏による。

邑久郡民家：岡山市神崎の根木俊三氏宅の伝世品。

年銘手水鉢：備前焼紀念銘土型調査委員会・備前市教育委員会1998 『備前焼紀念銘土型調査報告』